

巻頭言

自分と他者との差異の中にある 豊かさの発見

向谷地 生良 (浦河べてるの家/北海道医療大学/協同総研副理事長)

長きにわたって精神医療の世界では、治療の第一選択は薬物療法と専門家による操作的な介入が常識とされてきた中で、1978年に「オープンダイアログ：開かれた対話」を第一選択に行おうとする試みがフィンランドの北極圏に近いフィンランドの西ラップランドにあるトルニオ市のケロプダス病院ではじまりました。ちなみに1978年と言うと、北海道の浦河で「三度の飯よりミーティング」を理念とする当事者活動がはじまったのも同じ1978年で、イタリアで精神科病院に頼らない精神医療改革(退院した患者の受け皿となったのがワークーズ)がスタートしたのも同じ年ですから、偶然とはいえ、世界は「シンクロ」している気がします。

私は、この4月からオンラインですが、ケロプダス病院のスタッフによる「オープンダイアログの基礎トレーニング」を受けています。この対話実践を学ぶに際して、今回は現地で長年暮らされている日本人の目を通してフィンランドの国民の精神性やローカルカルチャーについて学びました。その中で、社会資源の少ない国の中で、何よりも人を「人材(人的財産)」として大切にする文化と、子どもの頃からさまざまな機会を通じて「対話文化」を学び、身につけるとい

言葉に感銘を受けました。

私も数年前に、ケロプダス病院を訪れ、研修を受けたことがあります。その際に、「オープンプリズン：開かれた刑務所」も訪ねることが出来ました。刑務所と言うと、物々しい警備体制と周囲を圧倒する壁を想像しますが、文字通りオープンで、何と鍵も自己管理なのには驚きました。その所長さんの説明の中で「たとえ犯罪を犯した人でも、私たちの国では大切な人材なのです」という説明がありました。つまり、フィンランドは、さまざまところに「オープン」というキーワードが根底にあり、活かされているのです。

そして、この度の現地のスタッフによるフィンランドの国民性を象徴する言葉として紹介されたのが「with-ともに」でした。それは、べてるの歩みから生まれた「当事者研究」の理念である「自分自身で、ともに」とも重なり、協同労働の理念とも軌を一にするものです。つまり、協同労働とは、働くことを通じて、どんな人でも地域のかげがえのない「人材(人的財産)」として尊重して、活かしたい、人と地域の成長を促す取り組みであるということが出来ます。

しかし、「現実には、そんなに甘いものじゃない」という声も聞こえてきます。

そうだと思います。そんな時に「対話」について、発信し続けている平田オリザの言葉「コミュニケーション(伝達)は、『伝わらない』ということから始まる」が私たちを勇気づけてくれます。つまり「対話の出発点は、ここにしかない。私とあなたは違うということ。私とあなたは違う言葉をお話しているということ。私は、あなたが分からないということ。私が大事にしていることを、あなたも大事にしてくれているとは限らないということ。そして、それでも私たちは、理解し合える部分を少しずつ増やし、社会のなかで生きていかなければならないということ。そしてさらに、そのことは決して苦痛なことではなく、差異のなかに喜びを見いだす方法も、きっとあるということ」(平田オリザ「対話のレッスン」講談社学術文庫)を信じ、模索し続けるプロセスこそが対話と協同の本質だと言ってもいいと思います。

その協同のプロセスの中でおきる「乱れ、揺れ、壊れ」の中で立ちつく尽くすこともあるかもしれませんが、その経験こそが意味あるかけがえのない対話のは

じまりであり、はじめから「美しい言葉、正しい言葉が、あらかじめどこかにあるのではない。それらは言葉の変化のなかで、少しずつ、私たち自身の内側から見つかっていくもの」なのです。

平田オリザは、最後にこう結んでいます。「まず話し始めよう。そして、自分と他者との差異を見つけよう。差異の発見のなかにのみ、二一世紀の対話が開けていく。差異から来る豊かさの発見のなかにのみ、二一世紀の対話が開けていく」と。

当事者研究という営みは、協同労働の歩みから生まれた実践知を活かしながら、「自分と他者との差異の中にある豊かさを発見するプロセス」(協同の発見)を地域に起こしていく取り組みでもあります。これは、私たちが暮らす地域の中に「対話」の文化を再生し、構築する営みであり、今年からはじまった「協同労働×当事者研究」の研修の取り組みも、その試みのひとつと言えるものです。その意味でも、協同労働は、私たちの社会に対話文化の大切さを呼び覚まし、草の根民主主義を根付かせる新たな対話実践であると言えるのではないのでしょうか。